心臓移植と源氏物語

槌田満文

先年、日本で最初の心臓移植が行われたとき、ジャーナリズムはその手術をめぐってさまざまに書き立てた。賛否両論のうずまくなかで、私はあることに気づき、ひどく興味をそそられた。それは、医者で小説を書いているQ氏が新聞記者に語った談話と、手術をした教授がモデルとみられるQ氏の小説とでは、全く違った意見や態度が表明されていたことであった。

当時Q氏は手術をした教授と同じ医科大学に勤務していた。——と書けばQ氏がだれであるかに気づく読者も少なくないだろう。しかしこの文章は小説ではなくて随筆だから、私はあえてQ氏という架空の名前で書く。そして以下に述べることも、すべて私の推測であることをあらかじめお断りしておきたい。なぜ、こんなに回りくどいことを書くかという点は、それこそこの随筆のテーマにかかわるから、最後までお読みくだされば、おわかりいただけると思う。

Q氏は手術について語った新聞の談話では、手術をした教授の立場を、どちらかといえば支持しているように受けとれる発言をしていた。教授に対する風当りが強くなりかけていたころだっただけに、私はその記事を読んでオヤッと思った。

ところが、それからしばらくして出た雑誌で、Q氏の小説を読んだ私はビックリした。小説の方では教授をモデルにしたとみられる主人公が、かなりきびしく批判的に描かれていたからである。

Q氏は事実の報道を原則とする新聞には、同じ大学に勤める人間として教授の批判はさしひかえた。しかしそれでは気がすまなくなって、フィクションとして読まれるモデル小説で、本心をあらわさずにはいられなかったのではないか。——私はQ氏の心理をひそかにそんなふうに推測した。

そして、文学史家勝本清一郎氏が〝随筆では真実が書けない〟という体験を述べていたのを思い出した。勝本氏はすでに故人だから、実名で書くことにしよう。

十年ほど前の『朝日ジャーナル』に、勝本氏が「こころの遠近」という連載随筆を載せたことがある。勝本氏の著作は『日本文学の世界的位置』や『近代文学ノート』などのエッセイ集を何回か読み返していたし、そのころもっぱら『座談会明治文学史』『座談会大正文学史』などで蘊蓄を傾けるだけだった勝本氏が久々に筆を執った連載随筆だけに、毎号欠かさず愛読した。

勝本氏の屈折した思想遍歴や尨大な読書量からにじみ出る文章の深みに毎回圧倒される思いだったが、ことに「和菓子」「眞贋随縁」などでは、忌憚のない商品の評価

や生ぐさい売買の内幕が実名のまま記されているのを読んで、一種の快感をおぼえると同時に、営業妨害で訴えられるおそれもあるのではないかと思ったりした。

はたして単行本の『こころの遠近』が出たのを見ると「あとがき」で勝本氏が「随筆は割に気楽に書けるものと思っていたが、連続して書いて見ると案外であった……」として、次のような感想をもらしているのを知ったのである。「随筆はどうしても事実ものがたりになるので、自分のことはともかくとして、他人のプライバシーに触れる傾きになる。フィクションの方が、人間の問題をそういうさわりなしに、純粋に、掘り深く扱えるという機微が分った……」

ホントと思って読まれる随筆に真実は書けず、ウソを書いていい小説ではじめて真実が書ける。――ここで私が連想したのは、勝本氏も先刻ご承知だったはずの、源氏物語「螢」の巻に出てくる有名な物語論であった。

「神世より世にある事を、記し置きけるなり。日本紀などは、たゞ、片そばぞかし。これらにこそ、道〳〵しく、くはしき事はあらめ。……その人のうへとて、有りのまゝに言ひ出づることこそなけれ、よきもあしきも、世に経る人の有様の、見るにもあかず、聞くにもあまることを、後の世にもいひ伝へまほしきふし〴〵を、心にこめがたくて言ひおきはじめたるなり……」

作者紫式部の「日本紀などは、たゞ、片そばぞかし」ということばから、私は「新聞記事などは、たゞ、片そばぞかし」という思いを深くする。新聞を作る側に立って仕事をしてきた経験からすると、新聞報道は一面の事実を伝えるにとどまり、核心をつかむ時間的余裕も、真実を描く表現能力も、きわめて乏しい宿命的状況にあると思う。新聞は事実を伝え得ても（それもしばしば間違えるが）真実を描くことなど望むべくもないのである。

このことは反面、近ごろはやりの実名小説なるもの（実名小説に近いモデル小説も含めて）が、いかにうさんくさい文学であるかを考えさせる。新聞記事のように実名を使ってある小説で本人からクレイムがつかないようでは、本人に都合の悪い真実は描かれていないに決まっているからである。

もし実名小説を名前だけ架空のものに変えたとき（それはある種のモデル小説に近くなる）読むに耐える作品がどのくらいあるだろうか。作者が生きた人間を紙上に造型する労力をしないでも、読者の方でその人物に関する予備知識や既成観念で補って読んでくれるところに、実名小説の安易さがある。Q氏のモデル小説にしても、そうした一面が全くなかったとはいえないのではないか。

紫式部もおそらく実生活の上では、Q氏のような体験もしたであろう。源氏物語が当時の読者に迎えられたのには、Q氏の小説のように、読者の方で事実関係をあてはめて読む興味も加わっていたかもしれないが、しかしそうした事実関係がまったくわからなくなってしまった現代でも、あいかわらず源氏物語が読まれるのは、そこに時代を超えた人生の真実が描かれているからにちがいないのである。